

生成する境界—いしいしんじの作品を例として—

小林 夏美

本論文の目的は、境界の動的な生成、およびその生成を成立させるところがいかなるものであるかを考察することである。その際、いしいしんじの長篇作品のうち最初期の三作品『ぶらんこ乗り』（理論社2000）、『麦ふみクーツェ』（理論社2002）、『プラネタリウムのふたご』（講談社2003）を例として取り上げ、境界の動的な生成、およびその生成を成立させるところがいかなるかたちで描かれているか分析する。

第一章では境界に関する地理学の空間認識に関する議論を検討する。その議論においては「第三空間」（ソジャ2005）、「進歩的な場所感覚」（マッシー2002）、「多様な軌道の時限としての空間」（Massey2005）という考えによって、不定形・否定形を用いたかたちで境界を動的に生成してくるものとして捉える視点が提示されている。この不定形・否定形の告知知らせるもの、すなわち生成を成立させるところに関しては議論が不十分であると考えられるため、プラトン『ティマイオス』において語られる「コーラ」に関するデリダ（2004）の議論を助けとし、その点に関する議論をより精査することを試みる。中山（2006）はコーラのもつ、受容者という「母」と逃れ去る「私生児」という「二重の性格」を指摘しているが、デリダ（2004）はそれを「奇妙な母」として描き出すことで、境界の生成を成立させるところを論じている。

第二章から四章では、いしいしんじの三作品ひとつずつに一章をあて分析を行う。

第二章では、『ぶらんこ乗り』において、語り手である「私」が弟の姿を再構築する過程を追うことで、はじめは自明化され固定されていた境界が徐々にゆらぎ、そしてその固定化が回避され、物語の着地点では境界の不定形が保たれていることを示す。

第三章では、『麦ふみクーツェ』において、「打楽器」や「へ

んてこ」といった境界区分の孕むナンセンスさを浮かび上がらせる要素を強調しつつ、「ぼく」が「打楽器アンサンブル」という「この世」の解釈にたどりつくまでを中心に描くことで、動的に生成する境界に満ちた「この世」の様相が示されるのを示す。また、「この世」の様相の焦点化の一方、境界の生成を成立させているところに関しては「この世の外」として遠景化され不問とされていることも示す。

第四章では、『プラネタリウムのふたご』がこの「この世の外」の遠景化の孕む問題を補完し得るものであることを示す。この作品においては、双子という要素と「手品」というだます／だまされることに焦点をあてることによって、幾度もの境界の「起源の手前」（デリダ2004: 88）への遡行が試みられる。それにより、「だます才能」と「だまされる才覚」の相互浸透によってその遡行を余儀なくする「ぎりぎりのダンス」としての「手品」により、人々が、否応なくみる「夢」越しの「必然性」によって境界の生成してくる瞬間に立ちあうこととなる様子が描き出される。

いしいしんじの三作品を通してみてきたことは、ソジャ（2005）やマッシー（マッシー2002、Massey2005）によって示された境界の動的な生成とコーラとの関係にもいい得るものである。境界の動態性はその生成を成立させるところによって支えられているが、それを語ろうとしたとき、できるのは境界の「起源の手前」（デリダ2004: 88）まで遡行しそこで「ぎりぎりのダンス」を踊ることだけ、不定形・否定形によってそれを逃れ去るままにしつつ告知知らせることだけである。コーラは語られないまま語られることによって保持され、そのとき境界は動的に生成してくるものとして立ちあらわれる。受けとることで場を与え、逃れ去るまま保持される「奇妙な母」（デリダ2004: 86）によって、境界は生成するのである。

「都市空間とアート」—東京文化発信プロジェクトを事例に—

及川 裕子

本研究の目的は、現代都市社会の空間編成における「アート」の効用と、その政治性を明らかにすることで、「アートは地域づくりに貢献する」という単純化された図式の再考を促すことで

ある。行政の文化政策や企業の社会貢献事業として、権力によって「アート」が多用されている現状を批判的に考察する一方で、「アート」をめぐる各主体の自覚的な実践は、「アート」が